

『その思いが叶うこと』ヨハネ13:36-38

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はついて来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになるだろう」。

13:37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。

13:38 イエスは答えられた、「わたしのために命を捨てると言うのか。よくよくあなたにしておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。

●序論

実はを映画化した物語「天国からの奇跡」。

ある一つのクリスチャンファミリー。主人公の女性は娘が正体不明の難病におかされ、あらゆることがうまくいかず八方ふさがりとなったとき、その心は苦しみに耐えきれず、神さまを捨て、祈ることをやめてしまいます。

そんな苦しい時間を経て、さらに最悪に思える事故がその娘を襲います。しかし、その出来事が、癒しの奇跡となりました。

多母である主人公自身もそれをどう受け止めていいのか戸惑っていました。

この映画をご覧になった未信者の方々が、映画の感想を残しておられます。それは、一様に「これが実話だとは信じられない…」というものでした。

ここまでお話しして「信仰」そして「祈り」という一面に注目してこの物語を見ると、祈りを捨てた主人公のお母さんが、この娘の奇跡を通して神さまのもとで、信仰、そして祈ることを回復していく、そんな物語にも見えます。

ペテロにまつわる物語も、もしかしたらそれに近いお話かもしれません。

ペテロイエスさまがとらわれたのち、イエスさまを知らない人々に応えるような裏切る者となってしまいました。しかしそんな彼も、復活されたイエスさまとの間に”対話”を回復し、また”信仰”、そして”祈り”が回復していく。

その序章が今日の記事だと結論づけてお話を続けてまいります。

●本論

I. ペテロの思いのかみ

ペテロは、少し前に言われた言葉に心が引っかかっていたのです。それが33節…。

13:33 子どもたちよ。わたしはいましばらくの間、あなたがたといっしょにいます。あなたがたはわたしを捜すでしょう。そして、『わたしが行く所へは、あなたがたは来ることができない。』とわたしがユダヤ人たちに言ったように、今はあなたがたにも言うのです。

そしてそれに対する、ペテロの強い”思い”というものが、ほとばしります。

13:36 シモン・ペテロがイエスに言った、「主よ、どこへおいでになるのですか」。イエスは答えられた、「あなたはわたしの行くところに、今はつい

て来ることはできない。しかし、あとになってから、ついて来ることになるう」。

そうじゃない。わたしの思いはそんなのではない、それがペテロの言葉に表れます。
13:37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。

ここにペテロの強い”思い”を見ることができます。

それがために、イエスさまが弟子たちに最も大切な戒めとしてお話になった言葉が届かないでいた。「わたしが愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という言葉が届かないでいたのです。

のちのペテロの否認（強い言葉を使えば「裏切り」）を知るわたしたちは、この言葉に見えるペテロのカミ、自己過信ということが彼の失敗ととらえます。

事実そうなのですが、そのすべてをイエスさまはご存じでした。

Ⅱ. イエスが示す「後になって…」

わたしたちの祈りの姿も振り返ると気づくことはないでしょうか。

わたしたちから、あふれでる思いは、「主よ、なぜ今解決してくださらないのですか？」と、”わたしの物語”に働くように、イエスさまを求めます。

先ほどの映画で言えば、「なぜ、今、わたしの愛する娘をいやしてくださらないのですか？」という訴えです。

その通りにならない中で苦しみ、主人公の女性は、祈ることをやめてしまいました。

祈りの世界で経験するジレンマは、わたしたちの信仰生活そのもの経験です。

わたしたちはしばしば、自分の強い思いと”自分の物語”の中に、神さまを置こうとしてジレンマを覚えるのです。

実は、そんな私たちの人生も家族も、そしてその歩みも、”神さまの物語”におかれていることを知ることができるよう、主はその言葉をもってわたしたちに気づきを与え、また経験を備えていてくださいます。

強い思いをもってイエスさまに迫るペテロに対して、イエスさまは数時間後には起こるペテロの姿を告げます。

13:38 イエスは答えられた、「わたしのために命を捨てるというのか。よくよくあなたに言うておく。鶏が鳴く前に、あなたはわたしを三度知らないと言うであろう」。

あまりにも具体的な裏切りを示す、その言葉をペテロはどんなふうに受け止めたかを、ヨハネは記していません。

ヨハネはことさらに、ペテロの失敗物語を描いてペテロを辱めようとしてはいません。その物語の顛末を淡々とありのままに記録することで、そのすべてを「神さまの物

語」として覆っているのです。

ペテロのカミも、また失敗もすべて知っていてくださって、神さまの物語としていてくださっていたのだと。

「神さまの物語としていただいている」。そういう風に、自分のすべてを見渡していくとき、わたしのカミも失敗も神さまによって変えられることを経験できる、それが十字架の赦し福音です。それがわたしたちの経験となるのです。

パウロはその経験をこういう風に表現しています。

ローマ8:28 神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。

Ⅲ. イエスは祈りとしてくださる

13:37 ペテロはイエスに言った、「主よ、なぜ、今あなたについて行くことができないのですか。あなたのためには、命も捨てます」。

ペテロは、この自分自身の言葉で苦しむことになります。

ペテロは、「自分はここまでできます。そうします！」とはっきり訴えていて、そうできなかったからです。

ここで気づかされる最も大切なことを、わたしは皆さんとともに受け止めたいのです。それは、このペテロのカミすぎた思いや、のちの時代の人々から見ると行き過ぎた言葉や思いも、すべて”イエスさまの物語”の中で、「祈りの言葉」としてくださっている、ということです。

祈りの原点に目を向けましょう。

祈りは、わたしたちにとって、神さまとの対話です。

わたしたちの祈りをお聞きくださるイエスさまは、わたしたちの言葉にあるカミも自己過信も、また否定的な言葉も、神さまへの文句にさえも、誠実に応答を返してください方なのです。

ペテロにとっては、「今はできない。でも後になってからついてくるだろう」という、彼にとっては「そんな答えじゃ満足できない…」というものでした。

さらに”自分はできる”と主張する彼に対して、彼があとで裏切ることさえも、イエスさまの彼への答えでした。

イエスさまはペテロの、そしてわたしたちのすべてを知っていてくださいます。

祈りは、神さまとのありのままの対話なのです。

ですから私たちの失敗の言葉に対しても、すべて祈りの世界で答えてくださいます。それが、私のつたない言葉さえも、「祈りの言葉」として受け止めてくださるイエスさまの物語なのです。

そしてこれを「恵み」と呼びます。それを受けるにふさわしくないほど、失礼で、

問題の多い私たちをも、そのイエスさまの物語の中で、癒し、回復し、つくり変えてくださるのです。

先ほど紹介した、実話を映画化した「天国からの奇跡」の中で描かれ、そして最後に主人公のお母さんが、最期に教会でその体験を証しする言葉にも表れています。

神さまはいくつもの人々に働く愛、不思議な出会いや奇跡を経験してきたことを振り返って証しているのです。

ペテロもまた、”後になって”復活のイエスさまとの対話で回復されて、自分物語ではない、イエスさまの物語を証しするものへと変えられていきました。すごいですね！

さいごに)

ユダと違い「ペテロにはなるまじ」という歌は知りません。

この二人の間に違いがあります。それはたとえつたない力みのある言葉であっても、素直に、自分の思いをイエスさまに語っていたか、ぶつけていたか…ということです。

ペテロも、あの奇跡を経験した母親も、その言葉はある意味乱暴でしたが、まっすぐイエスさまに向けられていました。そしてイエスさまが、その言葉を”祈りとして”受けとめてくださっていたのです。

そこにイエスさまの真実なやさしさがります。恵みと愛の世界が広がっているのです。まさにイエスさまは愛しぬいてくださっているのです

13:1 過越の祭の前に、イエスは、この世を去って父のみもとに行くべき自分の時がきたことを知り、世にいる自分の者たちを愛して、彼らを最後まで愛し通された。

だからわたしたちは大胆にイエスさまの恵みの御座に近づくことができる。わたしの言葉を祈りの言葉として下さる。そう信じるのです。